



昭和丙子台湾屏東之旅（昭和十一年 屏東）

南湾の屏東市は糖業と飛行連隊で名を馳せる人口四万の小都市である。高雄より東に僅か二十キロメートルに位置するが、途中下淡水溪という大河がある為自動車で行く事は出来ない。その為総督府は鳳山屏東の間に東洋第一の鉄橋を架け、鉄道を往来させている。屏東は元々阿猴と称し、土匪が跋扈し一日として安寧の生活を送り得ぬ蕃地であったが、総督府の威令に蕃人百族は皆帰順し、また台湾製糖株式会社が台南より本社を移し、また理蕃の為に飛行連隊が四十万坪の広大な飛行場を設けた事から、市街は内台雑居し益々賑やかになっている。屏東の街路は椰子と火炎樹が南国の興趣を催させ、一方で新しいモダン建物がドシドシ新造され正に日本帝国の植民地経営の威厳を示しているのである。

午後早く自分は屏東駅を降り、必要な所用を済ませ、今度は差し回しの自動車に乗る事半時間、旧友宋信雄君宅にて相当な歓待を受けたのだった。宋君一家は、家系図によると支那大陸より阿猴や布哇に移住し代々小商で生計を立てていたと云い、宋君は阿猴で生まれ台糖で小使として雇われていたが、十五歳の時単身日本に渡り海草郡役所近くのバーバーで髪結として雇われ後に小店を出していた。宋君は支那大陸の事情に聡く、株相場がアレだ段祺瑞將軍や蔣介石將軍がコレだと珍しい話を挟む事があり、また彼は眉目秀麗にして運動やら遊びやらが得意で其の界限では有名であり、宋君が台湾人である事を悔やむ人士少なからず、自分も宋君に忽ちぞっこん意気投合し不老 廓や新和歌で共に遊んだものである。宋君は和歌山に足掛け十四年おり結局台湾に帰る事となり、北京楼で送別会を開いたが、此の時宋君よりN社長やT弁護士を紹介され、如何に彼が多く知遇を得ていたかを知り半分吃驚半分嫉妬したものだった。

帰台した宋君は商機を得て陸軍相手に仲々繁盛していると云い、市外の家宅には親戚一同十一人の家属が住んでいると云う。宋君は和歌山から客が来たと終始ご機嫌であった。宋君の姪子に日本の人形やグリコ森永を渡したとこ

ろ森永のチョコレートは何と屏東産と聞き吃驚。夜は宋君家属より晚餐と称し醤油と塩味の効いた扣肉や山菜生姜の黒煮や豆腐の肉詰等ナドを振る舞われる。酒はなし。満洲國皇帝御愛好のポア茶も振る舞われたが黴臭く旨くない茶であった。明光紀三井寺や動物園に棲む色違いの瞳を持つ猫の話等、虎都（※和歌山の雅称）観光ばなしで甚だ盛り上がり、宋君の「和歌ノ浦にや名所が御座る」の謡で晚餐をめる。此の後宋君と兩人となり阪和中ノ島駅近くに出来た新地が仲々繁盛している事等を話した処、明日は屏東市の新地を案内される事となった。

朝六時起床、朝飯に白粥を飲む。粥に沈む蓬莱米は磯永吉博士が開発した台湾米で、年に二度収穫出来る優れた稲であり、内地の愛国米等よりずっと旨く好い値で移出出来る為、農民は蓬莱米ばかりを植えると云う。此の十年来、嘉義界限では水路が整理され、農業が大いに栄え（※嘉義はもともと農業で盛んな町であったが、八田與一氏の設計による嘉南大圳により生産額が十倍以上に増えた）、蓬莱米の隆盛に併せて不動産業や妓業も盛んになったと聞く。

午前、宋君は偕行社（※陸軍の将校クラブ）に用ありと云う。屏東の偕行社は板葺き平屋の素朴な建屋であり、此の辺は将校や官吏の住む地区で平屋建ての和洋折衷の建屋が密集している。自分は屏東市末広町にある彼の事務所の辺りで自動車を降り、一人で屏東見物に費やす事とした。屏東に見るべき風景は少ないと云うが、モダンな建物が多く、一方支那風の建物も見掛け、例えば清朝時代に建てられた城門は応挙の筆に掛かると如何にも幽霊でも出てきそうに興味深いものであった。自分は大宮町の阿猴神社に参拝し、屏東書院に見本蕃屋を見物する。屏東書院は屏東の語源となりし処で、清国嘉慶二十年（一八一五年）に当地に駐在した県丞劉蔭棠や文人墨客らが設けた書院であり、毎年孔子の祭典を行っている。当時は蕃害が酷く、孔子礼法をもって蕃民を教化せしめんとしたが、台湾経営の一方ならぬ苦勞が忍ばれる。

霧社蕃が大いに暴れ沢山の人々を殺傷した記憶はまだ新しく、台湾の船中にて蕃社蕃人の話を聞いた日には甚だ薄気味悪いものと思ひ警戒していたが、屏東の蕃人は性素直で日本語を解し人を酷く騙したりしない。しかし土地の婦人に由ると写真を撮ろうとするとモデル料を要求する為十銭銀貨を沢山持って行くよう忠告された。

屏東市若松町の中に見本蕃屋なるものがあってここで蕃人と会う事が出来ると云うので見てみる事にした。南湾の蕃人には貴族と称する頭目と平民の二種があり、大武山岳に大小多数の蕃社がある。見本蕃屋に居る蕃人は自分を平民出身であると云い、農業は幼稚であるが工芸を好むので民藝数寄であれば着目すると好いと云い、傍らの蕃女が身に付ける瑠璃玉を見せびらかしてきた。蕃人は朗々たる日本語で身上話を語る。自分は今上天皇陛下がまだ東宮におわしました頃台糖を行啓せされた時に御下間を賜る光栄を得たと云い、無窮の皇徳に浴する感涙を語るも、其の舌の根の乾かぬ内に今度はコーヒ豆を売りつけに来たのだった。此の豆は金槌で潰し、濾袋に入れ、湯で通し、砂糖を入れて飲むと旨いと何度も云い、要らないと云うと今度は日本語が解からないと返されホトホト困る。結局二袋買った。

ところで近来蕃人でも生や熟とに分けるのはけしからんとので、秩父宮殿下の御発案により前年（昭和十年）高砂族と云う目出度い名前が付けられたが、（※此の数行文字が消されている為解読出来ず。但し「^{かくしゅ}馘首」と解読出来る部分がある為起草の風習を述べたものと推測）、大武（山）西麓のパイワン族蕃人某社に黒々の風習があつて、青少年同志が互いの陰莖を口に含み快樂を得る者が多いと云う。日本の男色衆道と異なり女役は存在せず専ら快樂の遊戯に浸る事を旨とするが、過去隣社の男を^{けいかん}鶏姦し大事件となった事もあるそうである。此の話には続きがあつて、或る鮮人が陰莖の快樂を得る為此の蕃社に赴くも肛門を大怪我し陸軍病院に運ばれ大馬鹿モノ笑いとなった由。

夕刻宋君と落合い、八十五番の料理屋日^{にっしゅん}春楼の座敷で遊ぶ事となった。屏東は糖業において台湾第一の殷賑を誇

っているだけあつて酒に女の似合う町であり、料理屋も日春・井筒・梅園・朝鮮等と粒よりであるが、芸者や年増が少ないのが悩みと云う。内地の半玉崩れでも磨き様によっては屏東で立派な芸者として通用するのだから、力試しに来てみるのも好いだらうと自分は思うのだが、娘達はやれ疫病マラリヤの地だのやれ文果つる地だのと恐れて仲々そうは行かない。しかしながら屏東には内地出身の上等芸者が五人、台湾人の上等芸者も五人いて屏東名物の娘子合戦が行われているのである。料理屋には芸者半玉は勿論、カフェの酌婦や日本人台湾人朝鮮人蕃人支那人の娼妓までもが五族協和し夜の灯の王道楽土を築いているが、娼妓は朝鮮美人がやや優勢である。元々屏東を目指してやって来た者は皆無で、高雄辺りから拠り所無い事情により流れてきた者が多く、内地の悪徳新聞に過去の不祥事を散々書かれた女もおり、且つ性悪女も多ければ花柳病も多いので相当に気をつけねばならぬ。最近の内地では女がだぶついている為一夜の値段が下がっているが、台湾の田舎では日本のほぼ半値である。

酒は全て専売局によるもので、台湾では灘の生一本白鹿菊正宗があるが相当に貴い。台湾の清酒は蓬莱米で作られた瑞光が佳く、福祿は合成酒である。ビールには高砂とライトがあるがいずれも可である。此の他支那洋酒もある。蕃地では処女或いは閉経後の老女が米を口で噛み酒を作ると云うが、こうして醸した酒は連杯を持ち双人で飲むのが習慣であると云う。尤も台湾では晩酌と云う習慣を見かけない。そう云えば宋君も酒を口に入れない。もしかすると台湾人より蕃人のほうが上戸なのかも知れぬ。折しも横では総督府役人の慰安会が行なわれており、ソレ突けヤレ突けヨイノイの女声男声が混じり甚だ下品であつた。

二人して宋君宅に帰り、暫時睡眠する。朝五時にもかかわらず著しく暑く寝苦しい。周囲を散歩すると支那風の赤瓦の建物ばかりで、辺りは黒猫や黒犬がウロウロしていた。半時間歩いただけなのに玉のような汗がドッと出た。宋君の住む地区は客家ばかりで日本人蕃人は居ないと云う。客

家とは清代に台湾に移り住んだ漢人即ちちゃんころを指し、日本語を解するのは其の内半数程度である。宋君も客家の一人である。田圃には台湾バナナがたわわに成っている。台湾バナナは汽車に乗り高雄港に運ばれ緑色の硬い内に内地に移出すると云う。門司港のバナナの^{うたいうり}謡売は好く知られているが、これにも幾つかの流派がある。和歌山でも山地に芭蕉の木はあるが実は一切付かず。紀州和歌山の南国情緒と云っても結局南竜公の蘇鉄程度で台湾より明らかに劣るものである。

朝食に冷奴と称して出されたのは何故か炒めたピーナツ豆腐だった。ピーナツ豆腐とはまた支那らしい食物であるが、抑々考えてみると大豆をピーナツに変えただけの事である。ピーナツ味噌と云う食物もあり、金山寺味噌の様にして食べるとの事である。米国ではパンに塗る習慣があると云うが、台湾のピーナツを米国に輸出するのも面白いかも知れぬと下だらない事を考えながら食べていたら存外に旨かったのだ。また鴨肉の和え物も出されたが、台湾の料理に鴨が多いのは、水害が多い台湾では鶏は溺れてしまうが鴨は溺れない為との事だった。

今晚より屏東駅前^{ひんとう}の旅館に投宿する事となり、自動車で駅前まで送られる事となった。途中末広町の宋君の事務所に寄り諸手続を行い、昼食は近所のうどん屋でカレーうどんを食べる。昨今軍人の間ではカレーうどんが流行しているらしく、日本人は何にでもカレーを入れて食べるのが好きだと笑い、そんなに好きならばいっそ菓子にカレーを入れてみてはどうかと云うのだが、これもまた存外に旨いのかも知れない。自分の隣には大ボクロに沢山の毛の生えた肥えた^{おこ}醜男が大盛りの白飯を下品に平らげていた。宋君は自分に、あれは市尹^{しいうん}(※市長)の放蕩息子だからジロジロ見ないほうがいいと耳打ちした。台湾の各所各地には小さなボスが幅を利かせているのだと云う。田舎のボスを総理と云うが、夜の世界のボスはロマンと云う。英語のromanticではなく、支那語の^{ろうまん}老嫗、つまり掴みきれない老獪な嫗から来ているのだと云い、台湾各地の盛り場に居るロマン共はやくざ並に悪い者ばかりだから注意するよう

何度も忠告された。

向後自分は屏東には十泊し、途中牡丹蕃地を視察するのであるが、宋君の口利きで旅館に行李を置かせて貰える事となった。行李は比較に多かったので非常に有り難い計らいであった。翌日の蕃地視察に備え、夜は独り妓楼で遊んだ。朝鮮人と日本人の女が居たので日本人の方を選んだところ、これがまたとんでもない女で、背が低く可愛げのある顔立ちをしているのに、ちよんの間に入ると「元々内地に居たが結局屏東まで流れて来た」「福岡県の故郷に帰りたい」等と壊れた蓄音機のように身上話を垂れ流すのでホトホト閉口した。此の女は内地でも此のような働きだったから使い物にならず此処まで流れて来たのだろう。結局自分は何もする気も起きず金だけを払ったが、遣手婆にトンデモナイ女だと嫌味を云ったところ、選んだのは貴様だろうかと逆上してきた。向う腹が立ったが、宋君から昼間に聞いたロマンの話を思い出し我慢する事とした。

今日から蕃地視察である。屏東には四重溪と云う名の名泉がある。行き方は潮州で下車し、そこから貸切自動車^{かちくじどうしゃ}で三時間二十円位であるが、たまたま乗合自動車があったので三円程度で済んだ。

四重溪は日本帝国最南端の温泉であり、四季の景趣に富む為一名四時景とも称されている。先年高松宮殿下が御行啓し、現在は益々繁盛していると云う。明治初年に此の地にて日本帝国が残忍頑強な凶蕃^{ようちやう}を膺懲し清国から賠償金を得たと云うが、実態は全くの逆で、マラリヤにて多くの兵士が命を落とし戦費は賠償金に十倍したと云う。明治以来日本の軍隊は誤魔化しの天才で、近来は非常時と称し満洲に進駐するも、どうせ碌でもない姦悪な意図があって五族協和どころか無辜の満蒙支那朝鮮人民に不要の害悪を蒙らせる積りであろう。就中軍隊馬賊とは自分等の利益のみを増長させる奸賊共であり、全く以て信頼に値しない輩である。

さて、四重溪は蕃人と^{しょうらい}瘴癘が跋扈する辺地ではあったが、総督府は根気よく徳政を施し、僅か四十年で内地と違

わぬほど開発勃興したのだった。自分は温泉に二泊した。三四軒の温泉旅館があり、高松宮殿下が宿泊せられた山口温泉の戸口は黄色い蕃花で小奇麗に飾られていた。温泉の効能はカタル。芸者はほんの僅か、女中に娼妓を入れて十数名の小所帯であるが、女中は皆派出やかで酒に強く、座敷に屏風があったので虎虎をして遊んだ。千里走るよな藪の中を皆さん覗いてごろうじませ金の鉢巻きタスキ和藤内がエンヤラヤと捕らえし獣はトラトラ…。

四重溪を出て今度は貸切自動車で恒春に向かう。小一時間三円位。途中天然瓦斯が湧出する地獄門の出火と云うところあり。恒春庄は小さな城郭を持ち、昔は省城が置かれたところで、四時春の如しと云われる土地であるが、常時季節風に悩まされており、木麻黄と云う松に似た熱帯植物による防風林が多数植えられていた。此の海域は鯨の繁殖場で、捕鯨会社によると年間百頭捕れるのだと云う。ただ、抹香鯨の香りは魚油の焦げる酷い匂いであり嗅ぐに堪えなかった。自分は恒春で二泊し、有名な石門を見るなどした。旅館の主人と談話する。鄭と云う主人によると、恒春城の歴史について語り、昨年に城が史跡になったとしきりに自慢を云うので、和歌山城天守閣も昨年国宝になった為何やら親近感があると答えておいた。また、総督府は蕃害を撃退したのち此の地に鯨業農業を施したが、比較に男子が多いものの、花町がない為自らせんずりするのだと云う。正に商機なり。

つとめて、貸切自動車がらんびで鵝鑾鼻燈台を見物する。ガランビは日本帝国最南端の恒春半島の更に先端に位置し、燈台は白亜円塔の大灯（二万七千ルクス）による台湾八景筆頭の地であり、まさに絶景かな、絶景かな。燈台の傍にはガランビ神社と無線電信局が接していて、神社には茅輪に似た鯨骨の鳥居があり、敷地には白い砂が敷かれていて南紀の白良浜を思い出したのだった。季節風が強く樹木の多くはすでに傾いていた。また、無線電信局の十字アンテナは日本最終の連絡局であり、神戸横浜を出て欧州へ向かう船は此の連絡局に向けて「日本よさようなら」と報じているのだ。

屏東の旅館に戻り、写真や名刺等を整理する。ふと気になって蕃人に売りつけられたコーヒの袋を少し開けて飲んでみるが、殊の外不味い飲み物であった。曾て国性爺（鄭成功）の子孫が日本でカフェを開くも不味さの故に直ぐに閉鎖され、またコーヒは卵殻を混ぜて煮ると丸やかな滋味を得ると云うのだが、屏東のコーヒは煎方が酷く殆ど低劣なる代物で得体の知れぬ雑じり物多数あり、正に鹿の糞のごとし。そもそもアジアは茶業盛んの地であり、コーヒ等似合わないのである。俄か心で半端な物を作る位であれば茶業に専念すべきであり、コーヒ等はブラジルの移民に任せておけばよいのである。

ところで茶と一口に言っても日本茶台湾茶朝鮮茶支那茶は大きく異なるものであり、宋君は満洲国皇帝御愛好の例の支那茶を勧めてきたが、こちらは黴臭く三口四口吸るがセイセイであった。支那茶は碁石のように固める処も気に食わぬ、支那飲みも気に食わぬ。台湾茶にはウーロン茶と紅茶があり、ウーロン茶が優勢である。ウーロン茶は欧州では茶のシャンペンと呼ばれるが（※香檳烏龍茶の香檳はシャンペンという意味である）、内地の人口に膾炙するのは紅茶の方である。

屏東駅前の媽祖廟の近所に一軒の瀟洒な喫茶店があり、「黒き屏東のコーヒ 白き屏東の砂糖 何れも滋味なり」の文句が壁に飾られていたが、自分はドコガジャと思う。暫くして宋君がやって来て、薄味のコーヒを頼んでいた。自分は牡丹蕃地や恒春の事情について話す。宋君の口から出たのは、内地でドテライ事件が起こった、和歌山のとくしよく瀆職騒動や二二六に次ぐ事件が起こったと云うのだった。あらましを聞くと、宋君はニヤリと笑って、東京品川で情夫の浮気に腹を立て扼殺した末男の急所を切り取った妖婦が逮捕されたと云うものであった（※阿部定事件）。前代未聞のグロ変態事件であるが、宋君は蕃族の出草（誠首）と大差ないと平然と云う。宋君によると、台湾の蕃族には首ではなく男の急所を切る部族も居たそうで、支那大陸には長い間宦官の習慣があった為怪我の処置に慣れているが、蕃族は切り取る事のみが目的である故、運良く暫く生きる

事もあるが全て出血多量で死亡するとの事。また嘗ての台湾は海禁が布かれ女子の渡航が禁止されていた為男が圧倒に多く、鶏姦は当たり前であったと云う。鶏姦する者は対岸の福建から来た者に多く、急所を切る者は山辺に多い。此の悪習は劉銘伝氏が台湾を経営する頃に一旦途絶したが、日本帝国の台湾経営が始まり、今度は九州出身の兵士が屏東中学校に通う紅顔の台湾少年を惑わせているのだと云う。中には軍人を手玉にする悪辣な不良少年もいて、巻き上げた小遣い銭を貯め内地に渡航した者も居ると云う。事業や学業に成功した者も居るが、中には大阪釜ヶ崎界隈で男娼置屋にヤツする者も居て、また彼の姉は飛田に居ると云うのだから、「姉は吉原弟は芳町、同じ勤めの裏表」と同じく真遺憾に堪えざるものである。ところで日本の兵士が少女を姦淫した例は聞かないが、童女趣味の兵士だって相当多い筈だから、単に軍法会議で相当厳しく罰せられる為に自制しているのか、若しくは事件を闇に葬っているのかは不明である。そう云えば先般屏東の料理屋に少女が出入りするのを見たが、宋君に訊くと此の子等はおちよば等ではなく単に踊りの稽古に通っているのだと云う事である。宋君は和歌山に居た頃から女色男色の此の手の話題に明るく、南方熊楠翁の「歩く和漢三才図会」に比し、宋君を「歩く金瓶梅」と例えた人士が居たが、確かに彼のエロ博覧強記振りには何時も顔かされてしまうのだった。

若松町の見本蕃屋に立ち寄る。先日の蕃人がいたのでコーヒの劣悪振りを抗議すると、奥から小供が泣きながらやって来て「ニホンノオジサン、オトーサンヲイジメナイデクダサイ」と喚き叫ぶ。全然泣き止む気配がないので十銭玉を渡すとケロリとして奥に帰っていった。見本蕃屋には自分以外の客は居らず件の蕃人と雑談していたのだが、流暢な日本語で今度は「処女の品評会」と題する猥談を語るのであった。自分は屏東に蕃人の娼妓はいるのかと聞いてみたら、皆台東花蓮宜蘭から来た土人ばかりで我々はしないと云う答えだった。蕃人は檳榔びんろうをクチャクチャ噛みながら、日本人は娘が成長するとすぐ妓楼に売り飛ばして博打

で身を滅ぼすが我々は一切しないのだとけしからぬ事を抜かしたのだった。

暫くして今度は自分の故郷の話 시작했다。自分の故郷は屏東より東四十キロ程離れたクチクチと云う小部落で狩猟や農業で生計を立てていたと云う。頭目は三十歳位の偉丈夫であるが親子程年齢の離れた年増の妻が居て、妻の名を呼ぶ時英語風に「マミー」と称しているのだと云う。部落に居た警察官が頭目に色々手引きした挙句西洋かぶれになったのだと云うが、元々頭目には其の素質があったのであろう。嘗て清国官吏は自分等に対して全くホツラカシであったが、日本帝国の役人警察官はヤレ時間だヤレ何某だと一々喧しかったと云う。しかし部落に保健室が置かれ不潔な場所が減りマラリヤ疫病で死ぬ者はメキメキ減り、片仮名を読める者も増え、其の徳政を盛んに喧伝していた。近地の三さん地門蕃地ちもんでは蕃人視察の接待役を仰せつかって台北のウライ蕃地（※現在では温泉で有名である）に学べとばかりに栄えているが、自分も日本語を一生懸命勉強しここで日本人の接待役を志願したのだ、今現在自分は日本帝国御公認の蕃人であるのだと豪語していたが、実際はかくの如し。蕃人の習慣吹聴等は噴飯ものが多く仔細の検討に堪えぬ事が多いものである。

此の他蕃人より習俗事情について種々聴取した処、蕃人の祭は首取祭の他、夏祭秋祭、また蕃地で三年に一度举行される祖霊祭（※パイワン族の人神盟約祭。五年に一度行われるが、当時は三年に一度だったようである）は長い竹槍で霊球を刺すと云う些かオリムピックの趣がある男祭である。自分は和歌祭や粉河祭の話をしたが蕃人は一切興味を示さなかった。屏東蕃人は壺と瑠璃玉を崇めると云う。壺には父壺・母壺・陰陽壺の三種があり、父壺には陰莖大蛇の模様（※パイワン族は百歩蛇という毒蛇を民族の守り神にしている）があり、母壺には乳輪の模様があり、陰陽壺には両方の模様がある。原来神功皇后征西の頃に作られた物と云うが、眉唾である。此の他東京の好事家が陰陰壺・陰陽陰壺なる秘壺を求めにワザワザ屏東まで来たと云うが、仮に事実であれば物好きの極みである。瑠璃玉は婚礼

結納に用いると云い、優秀なる瑠璃玉を製造する名匠は初夜権を持つと云う。また此の後歌垣や初夜の楽しい話をしやると云いながら丁度好い処で話を切り、続きを聞きなければ煙草だか檳榔だかを要求するのだった。仕方なく煙草一本を呉れてやると、蕃人は蕃語で祭囃子を謡いはじめたのだった。見本蕃屋を出て棋院に寄るが支那将棊ばかりでどっちが勝っているのかすら全く分からず、また兩人ギラギラと打っていたのでもしかすると博打だったかも知れぬ。また夜に蕃人に教えて貰った土人妓女の居る妓楼に行こうとしたが其の地番に建つのは屏東警察署であった。

今日の屏東は篠突く雨が降っていた。仕事らしい仕事もなく映画でも見ようと思ったが雨風が相当酷く断念した。台湾には「竹風蘭雨」と云う語があるが（※台湾北西部の新竹は風が強く、北東部の宜蘭は雨がよく降るという意味）、屏東や恒春も相当に風雨が強く台風の銀座であると称される。方便なく旅館に籠もり一日中書き物をしながら新聞を読んでいたが、屏東の話題は甘蔗糖業が殆どで、其の他市尹の動静や妻帯の日本人巡查と蕃女の醜聞、キ印が行方不明になった話が面白可笑しく書かれている位だった。夕方になると雨も止み今度は急に蒸し暑くなったのでブラブラ外出する。先日の例の妓楼の前を通ると玄関が減茶苦茶に破壊されていた。風雨の所為かと思ったのだが、後で聞いた処、ロマンを怒らせた為にギタギタに壊されたのだと云い、遣手婆も酷い折檻を受け大怪我を負ったとの由。実にいい気味だがストームのような壊れ振りを見ておめこする気が失せてしまい、結局今日の外出は近所の小料理屋にて卵丼を食べた位であった。帰りに露店に寄りマンゴーと云う果物を買ったが、馥郁たる香りに甘美な味は正に百果の王と云うに相応しい。但しバナナと違って移出が禁止されているので実に勿体無い事であると思った。屏東には木瓜も多く、苗木を無償で配付していると云うがこちらは自分の口に合わなかったので買わなかった。旅館に戻り主人や旅客と夜伽話となった。客の一人が台湾百合の球根は子孫繁栄の強壯剤として効能あらたかであると云う。

漢方薬の百合^{ひやくごう}は動悸息切れに使う薬であると聞いた事があるから所変われば正に効能も変わるのであろうが、それを云うなら恒春鯨業の隠れた産物である龍涎香^{りゅうぜんこう}でも挙げるべきで、実際高雄では惚れ薬と称し阿片より高く売れるのである。龍涎香は内地よりも支那大陸で売れると云い、仲買人が大量に買いつけた龍涎香は支那大陸に渡り、今度は軍閥実業家郷紳の目前で裸の処女の肌に塗り込んで効能を説明し台湾の五倍十倍の値で売りつけるのだと云う。旅館の壁にはヤモリ共が居てキュキュと鳴きながら蚊をべろりと食べていた。

台湾滞在も残り少なくなったので、旅館で屏東土産は何が好いかを聞いた処、翡翠・珊瑚・蕃人の瑠璃玉細工が好いと云われた。尤も翡翠は軟玉が殆どであり、珊瑚は持ち帰るのが難しく、瑠璃玉は内地で価値を持たない。コーヒー豆はわざわざ買うべきものではないと云われた。夜、某所にてバナナクリームを食べながら宋君の噂話を聞いた。宋君は博愛主義者（※ポリアモリー。もしくは色情狂）であると云い、ロマンの一人だと云う。彼もまたロマンの一人であると聞き一遍で驚いたが、もう一遍では何やら腑に落ちるのだった。若い頃の宋君は和歌山でも相当な事情通として知られていたし、現在の宋君は屏東の官庁軍隊花柳界に知悉し無気味な処がある。台湾の盛り場と云う盛り場にはロマンと云うギャングが猖獗^{しょうけつ}し警察権力を以てしても仲々殲滅^{せんめつ}出来ないのであるが（ロマンは老鰻と書き、なぜ此の字を充てるかと訊くと、煮ても焼いても喰えないから此の名が付いたのだと云う）、宋君の揺れない自信は、恐らく此の屏東では何をしても安全だと云う確信があるからなのであろう。となると、屏東で活躍していると云うより単に傍若無人な立場にいるのかも知れぬ。もし彼が例の妓楼を無茶苦茶にしたと云うなら、もしかすると自分が原因を作ったのかも知れぬ。となると、気の毒な事をした者だと思ふ。ところで官憲に捕縛されたロマンは台東開導所に送られ、矯正の名の下で辺境開発の肉体労働に従事させられると云う網走監獄のように恐ろしい処であると云

う。台北界隈のロマン共は台東と云う場所を聞くだけで正に死刑宣告を受けたかのように震え上がるのだが、自動車さえあれば屏東より一日で行ける距離だそうである。更に曰く、宋君は単なるロマンに非ざる、屏東では土皇帝（※田舎のボス。戦前の台湾では台湾総督を指す言葉でもある）に等しくあの男は何をやっても逮捕されないのだと。土地商業の基盤を持たぬ一介の本島人が此処までの権力を持つ事は俄に信じがたいものであるが、立身出世の方途は単に大臣博士に限らないものであるし、彼なら遣りかねない節もあるから、マア、巧くしてやったと云うべきであろう。

ところで台湾人は殆どが良民であるが、悪人は相当に残酷こうかつ狡猾の徒であり、我々も日本を離れて南国風情に酔いながら蕃地視察だの温泉療養だのにかまけて居る内はまだ好いが、軽い気持ちで台湾で一旗揚げようと云う日には大小無数の罠がバツクリと口を開けて待っていて、我々の心胆を必ずや寒からしめるであろう。我々が迷信の徒だの無知蒙昧だのと嘲笑う蕃人は相当に利巧であり、台湾黒社会に根を下ろすロマン共もまた一筋縄ではいかない連中である。総督府の役人は無能、営林署の役人は怠惰、軍隊はウツスキ横暴膀胱カタルの徒、いずれも日本帝国の権力を笠に着る者共であるが、五族協和を忘れ相手を軽んじた結果相当に悲惨な結末に身をやつす日本人は多く、台湾人沖仲仕の下で米国の苦力の如き逆境に甘んじる男共や妓楼に売られ性病に斃なほれる女共は掃いて捨てるほど居るのである。大和民族の血以外に何一つ誇るものの無い連中は即刻ホームシックに罹り、帰り得ぬ故郷の話を繰り返し、果ては脳病に罹る者も居る訳で、恐らく此の連中は相当の事が起こらない限り生涯台湾から離れる事は能わないであろう。

台湾は気候良好で物産が豊富であり日々発展しているから食うに困らない。農業も不作凶作が存在しないので、

キッチンと働きさえすれば内地のように子女を女衞ぜげんに売り払ったりする必要はないのだが、仮に軽い気持ちで移民したが最後、強欲な拓殖会社が我々の儲けの上前を撥ねるだけで自分等には何んにも残らないのだ。

昨年は台北市で博覧会が賑々しく開催された。台北市で開催された博覧会を和歌山市でも開催せんと試みる人士が居て、自分も期成会の発起人になる事を勧められたが、前代未聞の瀆職事件が起こるような腐敗都市（※昭和十年実施の和歌山市長選挙で汚職騒ぎがあり、翌年内務省から市長の解職と市会解散を命ぜられたことを指す）に博覧会など覚束ない話である。只一年後の自分は日本には居らず恐らく南湾の高雄か屏東辺りで稼業に就いているかも知れない。此の度の屏東の旅では台湾の多大な可能性を直截見聞きする事が出来たが、若し仮に台湾の可能性について論じる機会があるなら、自分は台湾は情緒が全てにおいて大らかであり内地の酷い締め付けとは無縁である事をイの一番に挙げるだろう。内地から些か遠いのは残念だが、飛行機や飛行船が発達すれば利便も相当に増す筈であるし、内地は時局緊迫にして軍国が進み締め付けは更に酷くなる一方で、台湾は闊達に発展すると思う。朝鮮は既に開発され、支那は排日が酷く、満洲はソビエットに近すぎる。しかし台湾は内地に近く反日排日の気質はなく四方海に囲まれ極めて安全である。将来の東亜の栄華は日本帝国と台湾とで二分する事は火を見るより明らかである。また妓業も発展の余地が多く、また台湾人もまた本島人蕃人関係なくエログロナンセンスや変態性欲を好む事もわかったので、先進の方法を取り入れれば、目下の料理屋妓楼相手に十分渡り合い、そして必ずや我々の方が優勢となるであろう。日本人はやれカラユキだのやれ関東軍の住血吸虫の如きエロ酌婦（※従軍慰安婦と思われる）だのと危険な外地に活路を求める傾向があるが、其の点台湾は安全であり、且つ妓業が未来の産業として真に刮目すべきのものであると自分は思いを新たにすのだった。

（昭和 11（1936）年 5 月）